



ちょっとこぼれ話 XLV

濱口 恵子

今回は、ヘルメースを取り上げてみたいと思います。今までに、使者としての役割を果たすヘルメースを何度か登場させたことはありますが、まとめて書いたことはありませんでした。ここで、ちょっと整理をし、全体像を見てみましょう。

ヘルメースは、ゼウスの息子で、オリュンポス十二神の1人です。母親は、アトラスとプレイオネーの娘で、プレイアデスの1人であるマイアです。マイアは、アルカディアのキュレーネー山に住み、そこの洞穴でヘルメースを生みました。

ヘルメースは、富と幸運の神であり、商売、盗み、賭博、競技、旅人、道と通行人を保護する神です。また、夢と眠りの神で、靈魂を冥界に導く役目もありました。でも、一番よく知られているのは、ゼウスに仕え、神々の意思を伝える使者としての役割でしょう。諸市では、豊穡の神として祀られていることもあり、豎琴、笛、アルファベット、数、天文、音楽、度量衡を発明した智者でもあります。本当に数多くの役割を持っている神です。

今まで、パリスの審判、ギリシアの英雄オデュッセウスの帰国物語や、ヘーラクレスが冥府の番犬を地上に連れ帰る話など、多くの物語に登場してきましたが、ヘルメースが主人公の物語はというと、あまりないようです。

パリスの審判では、ヘーラー、アテーナー、アプロディーテーの3女神を、ゼウスの命令によりイーデー山中のパリスの許に導き、パリ

スに、誰が一番美しいかの審判をさせました。カリュプソーの島で、望郷の念に駆られながらも帰国が叶わずにいるオデュッセウスを、故郷イタケーに帰国させるようゼウスから指令を受けて訪れたのが、ヘルメースでした。生身の人間であるヘーラクレスが、十二功業の最後の仕事として冥府の番犬ケルベロスを捕まえて地上に連れ帰ることを命じられた時、冥府に生きたまま行って帰って来られるようにと、ゼウスの計らいで遣わされたのが、ヘルメースとアテーナーです。ゼウスから命令を受けて、冥府にいるバルセボネーを迎えに行き、地上にいる母親デーメーテルの許に送り届けたのも、これまたヘルメースでした。

ヘルメースは、オリュンポス十二神の中で一番若い姿の青年神で、異母兄のアポロンが神託を司る神で、近寄りがたい威厳を備えているのに対して、伝令の神という性格上、ある種の親しみやすさを醸し出しています。

ヘルメースは、生まれた時から、人を騙す術に長けていました。生まれてすぐ、未だ産着に包まれていたにも関わらず、産着から這い出してテッサリアの北のピーエリア地方に行き、何とアポロンが飼っていた牛の群から50頭ほど盗み出してしまったのです。そして、その痕跡を上手く消して、エーリス地方のピュロスに牛の群を連れて行きました。途中、バトスという老人に見つかりますが、買取して黙らせました。2頭の牛を犠牲に捧げ、煮たり焼いたりして食べた後、残りの牛を洞穴に隠しました。

キュレーネーに戻り、洞穴の前を歩いていた亀を見つけてその甲羅を剥がし、犠牲に捧げた

アポロンの牛の腸で作った弦を張り、初めて豎琴を作り出したとされています。また、豎琴を弾くバチも発明しました。

さて、アポロンは、牛が盗まれたのに気づき、方々を捜し回って、ピュロスに辿り着きました。自身で占い、牛泥棒がヘルメースと知ったアポロンは激怒し、母親のマイアの許へ行って、責め立てます。マイアは、生まれたばかりの赤ん坊にそんな大それたことができるわけがないと、取り合いません。

怒り心頭に発したアポロンは、ヘルメースを連れてゼウスの所へ行き、牛の返却を命じるようゼウスに要求します。当然のことながら、すべてお見通しのゼウスがヘルメースに牛を返すように命じると、ヘルメースは、しぶしぶ牛を返しました。その時、ヘルメースが、これ聞こえよがしに自分が発明した豎琴で美しい曲を奏でると、アポロンは、その珍しい楽器が無性に欲しくなり、牛と豎琴を交換してくれと言います。策略をめぐらすことに長けたヘルメースは、豎琴と交換することによって、まんまとアポロンから牛をせしめたのでした。美術作品で、よくアポロンが持っている豎琴は、ヘルメースが作った物です。

次に、葦で作った笛を吹くと、アポロンはそれも欲しがり、代わりにケーリュケイオンと呼ばれる、2匹の蛇が巻きついた黄金の杖を与えました。以後、ヘルメースは、常にケーリュケイオンを持つことになります。蛇が1匹だけ巻きついた杖は、医術の神アスクレーピオスの杖ですので、お間違いのないように。

図に乗ったヘルメースは、杖を得ただけでは飽き足らず、占術も教えてほしいと言い張ります。あまりにもしつこいので、アポロンは、仕方なく小石を使った占術のみを教えました。

ゼウスは、このようにずる賢く、交渉上手なヘルメースの才を愛でて、しばしば重要な任務を与えました。ヘルメースの有名な話として、次のようなものがあります。

アルゴスの古くからあるヘーラーの神殿に、

イーオーという美しい女神官がいました。ゼウスは、イーオーに一目惚れをし、しばしばイーオーと逢瀬を重ねます。ある時、嫉妬深い妻のヘーラーの眼を盗み、厚い雲に隠れてイーオーと逢引きをしていたところ、ゼウスを捜していたヘーラーに感づかれてしまいます。ヘーラーをごまかそうと、ゼウスは、とっさにイーオーを牝牛に変えてしまいますが、ヘーラーは騙されません。ゼウスに牝牛をねだって自分のものとし、さらに、百眼の巨人アルゴスを見張りにつけたのです。百の眼で、日夜、見張られているので、ゼウスは近づくことすらできません。

そこで、ヘルメース登場です。イーオー救出の任務を、ゼウスは、ヘルメースに与えます。簡単な仕事と安請け合いをしたヘルメースでしたが、百の眼が交代しながら絶えず見張っているのが容易に事が運びません。仕方なく、ヘルメースは、鎌でアルゴスの首を切り落として、イーオーを救いました。アルゴスは孔雀に変身したとも、死後、ヘーラーがその眼を取って孔雀の羽根に埋め込んだとも言われています。

執拗なヘーラーから逃れて、イーオーはさまよい歩き、ヨーロッパからアジアの地に渡りました。イーオーが渡った海は、牝牛の渡し「ボスポロス」と呼ばれています。そして、エジプトに辿り着いて、やっとゼウスに人間の姿に戻されたのでした。

ヘルメースは、紀元前8世紀からペルシア戦争中の紀元前480年までのアルカイック期の美術では、他の男性神と同じく、髭を蓄えた姿で表されますが、時代が下がると、凛々しい青年の姿で表されるようになります。

通常、ヘルメースは、ペタソスと呼ばれるつばの広い、時に有翼の帽子を被り、手には黄金の杖ケーリュケイオンを持ち、タラリアと呼ばれる有翼の黄金のサンダルを履いた姿で表されます。時には、鎌を携えていることもあるようです。美術作品では、ヘルメースを象徴するこれらの物を持たせていることが多いので、すぐにわかります。